

# 中国

## 戦争体験と外地引揚げ

岩手県 小島 正吉

国鉄から外地鉄道へ

私は大正八（一九一九）年二月二十五日、栗駒の山々より吹きつける寒風が肌を刺す厳しい冬の日に、岩手の一関市の農家に生まれた。家は小作農で、兄が二人、姉が一人いて、子供の時代から極貧の中で育っていた。

私が小学校一年生のときに、父は四十歳という働き盛りの若さで死んでしまった。残された家族は母と子供五人だったが、そのときは既に兄二人は学校を終え

て働きに出ていたので、家にいたのは姉と私、それに妹の三人の子供で、それからは母の手一つで育てられた。

昭和八年の春、私は地元の尋常高等小学校を卒業するとすぐに印刷屋に働きに出たが、当時は既に満州事変が始まっており、世間は戦時色が濃厚となりつつあった。そのため、こんな東北の片田舎でも兵役適齢期前の若者は、みんな青年学校に入って軍事教練を受けるのが当たり前とされていたので、私もみんなと同じように青年学校に入り、軍事教練などに励んでいた。

その後、かねがね希望していた国鉄職員の採用試験を受け、幸いに合格してあこがれの駅務員となった。

当時の国鉄では、各職種の部内試験に合格すること

により、逐次昇進をする制度となっていたので、私も、少しでも上にあがり、家族の面倒を見られるようになりたいと念願して、駅務員としての勤務に一生懸命に努めていた毎日の仕事の中で、寸暇を惜しんで勉強をしていた。そのかいがあつて仙台鉄道教習所の電信科の試験に合格した。

教習所での六カ月間の教育・訓練を終了して、盛岡駅の電信掛を拝命して盛岡駅で勤務するようになった。今までの努力が実つたことで私は嬉しかった。

昭和十二年七月、盧溝橋で日中両軍の衝突により支那事変が勃発し、大戦争への口火となった。

それからは満州から中国へと、逐次戦線が拡大していく一方であつた。

軍の作戦の必要から、満州中国での鉄道輸送力の増強が焦眉の急となつてきた。当時、満州国内には「南満州鉄道」があつて満州の大幹線鉄道としてその役割は大きく、民需としても特急「アジア号」を走らせるなどで世界の注目を浴びていたが、軍需においても、軍隊輸送や軍需物資の輸送などで軍事行動に大きく貢

献していた。

中国領土内には、華北に「華北交通」が、華中に「華中鉄道」があつてそれぞれ営業をしていたが、南鉄道でも、戦線の拡大に伴つてその鉄道設備も拡充し輸送力の増強を図っていたが、今度は鉄道職員の不足をきたし、それを補うために満鉄から多数の職員が応援として両鉄道に派遣されたが、それではとても足らずに、内地からも鉄道業務経験者を大量募集することとなり、大々的な宣伝が行われた。

私は当時の国民感情からも、何かお国のお役に立ちたいと思つていたので、その話を知つて、勇躍応募した。盛岡運輸事務所の管内から十数人の応募者があつた。一行は下関から関釜連絡船で釜山に渡り、そこから朝鮮鉄道で北上し、満鮮国境を越えて満州国に足を踏み入れた。奉天にて京奉線に乗り換えて北京に向かつた。

北京に到着して、そこで各人の所属先が決められたが、私は華北交通に入り、本社近くにあつた北京電信所に配属された。

宿舎は北京駅の近くにあり、北京でも有名な飲菜街があつて、夜ともなると遊客を呼び込む声や酔客の発する奇声などでけんそうを極めていた。

宿舎から勤務場所の北京電信所までは、東長安街という、各国の大使館や駐屯軍兵營などがある官衙街を通つて行つた。

華北交通本社は、北京市内の王府井という場所にあつたが、ここは北京でも有名な繁華街である北京銀座街の中にあつて、彼の北京飯店も近くにあつた。また、今でいうブランド品を売る店舗が軒を連ねていて、すこぶるにぎわつていたものである。

当時、北京は世界各国の首都の中でも、「西の花のバリ」と並び称されて、「東の北京」といわれていたとおり、美しい都市であつた。

北京はその昔、明朝・清朝の時代から中国支配の中心地であつたところで、紫禁城など多くの歴史上有名な建造物が多くあつた。紫禁城はその後、故宮博物館となつて、中国歴代の皇帝等がその持てる力に飽かして収集した文化遺産が収められている。紫禁城の南側

には天壇がある。天壇の内部は三層の祭殿になつていて、美しい瑠璃色のかわららが有名である。そのほかにも市内には北海公園や中南海公園などがあつて、人々の憩いの場となつていた。

北京郊外には、清朝の西太后が当時の海軍の予算を削つてまでも造つたといわれる頤和園があつた。ここは、人造湖に石舟を浮かべた景勝の庭園で、湖は昆明湖、築山は萬寿山と呼ばれていたが、私も二、三回ぐらい遊んだことを思い出す。

入社して半年ほどたつたところに、鉄道線路警備の仕事に回されることとなつた。これは支那事変の戦線拡大に伴つて占領地が広くなり、軍事上の要求から鉄道輸送の重要性がますます高まつてきたが、それに比例して、我が方の鉄道に対する敵側の妨害事案が増加してきたために、鉄道警備、特に線路の保全が大きな問題となつてきて、その対策の強化が求められてきたもので、会社自体としても鐵路警備力を増強する必要性にせまられてきたからであつた。

共産八路軍の妨害工作は特にし烈になつてきて、鉄

道線路が破壊される事件は日常頻繁に起きてきたし、更にはそれがエスカレートして、我が方の駅舎や警備隊の駐屯地まで襲撃されるようになってきた。

しかし、怒濤の如き勢いをもって進撃を続けている陸軍は、徐州、太原、南京、漢口などの重要地点を次々と陥落させた。しかし、大局的に見ると中央軍をただ奥地に追いやったに過ぎないような結果でしかなく、我が軍の戦線は延びに延びて補給が大きな負担になってきた。

このような情勢において、鉄道輸送ということが軍の戦力を維持するために最重要な問題となってきた。その重要な鉄道が抗日組織によって妨害されている事態は、どうしても排除しなければならぬことである。そこで鐵路警備の必要が叫ばれるようになってきた。

全く、占領地は点と線だけであった。点とは占領した主要な都市、緊要地形などであり、線とは鉄道線路とか主要幹線道路とかである。それ以外の広大な占領地域（面）はすべて共産八路軍の支配下にあった。主

要都市から離れている部落などにいた我が方の小守備隊などが、共産八路軍に襲撃されて全滅する事件は頻繁に起きていた。

鐵路警備隊の任務は、主として主要な幹線鉄道線路を監視・警戒することにあつた。華北交通としては、京奉線（北京・奉天間）、津浦線（天津・上海間）、京漢線（北京・漢口間）、石徳線（石門・徳県間）、石太線（石門・太原間）などが警備対象の幹線鉄道で、妨害工作、直接襲撃などに備えて装甲列車に乗務して警備をしていた。その間に、共産八路軍からの襲撃を受けたことも数回に及び、線路が破壊されて装甲列車が立ち往生したことも度々あつた。場合によっては、運なくここで死ぬかもしれないと思つたことも再三あつた。しかし、気持ちのうえからは充実していた時代であつた。あつと思う間もなく数カ月が経過してしまつた。

現役兵として入営

昭和十三年に徴兵検査のため華北交通を休職して、一年振りに故郷に帰つた。一関で検査を受けたが、結

果は甲種合格であった。

昭和十四年十二月一日に、当時、青森県東津軽郡簡井村にあった陸軍電信第四連隊に入営することとなり、母親や家族のもの、親類の人々、村の人たちなどの盛大な見送りを受け、一関の駅を出発し青森に向かった。その夜は青森市内の旅館に泊まり、翌日の十二月二日に連隊の門をくぐった。

電信第四連隊は、歩兵第五連隊の右隣りの地域にあって、有線第一中隊、有線第二中隊及び無線第三中隊ならびに連隊本部などで編成されていて、連隊長は山路という大佐であった。当連隊は、弘前に師団司令部がある第八師団の直轄の通信部隊である。一緒に入営した初年兵は東北六県の出身者が大部分で、その他に新潟県や東京府の出身者も少なからずいた。青森地方でも、特にこの東津軽一带は名だたる豪雪地で、通常でも胸まで達する積雪となるので有名である。

毎朝、凍えるような寒さの中で、営庭の雪踏みさせられたことが今でも強く印象に残っている。厳しい

寒さの中にもかかわらず、戦時下ということもあって毎日の訓練は激しいものであった。

私は、有線第一中隊の第一班に所属させられた。班長は軍曹で、班付きの下士官は伍長であり、内務班では鬼より怖いといわれていた古年次兵がいて、毎日昼夜を問わずにしごかれた。銃の手入れが悪いとか、態度が悪いとか、返事が遅いとか、ささいなことに言い掛かりをつけられては殴られたものであった。消灯後、寝床の中で悔しくて、悔しくて、泣いたものであった。また、食事の量が少なくて腹が減って仕方がなかった。寝床に入っても腹の虫が鳴いて寝つかれないことも度々あった。

二年兵の戦友がうま厩当番になっていたときに、私が頼まれて厩舎に毛布を届けに行ったが、そのときに残っていた飯を食べさせてもらい、空腹を満たすことがあった。

日曜日は訓練が休みであったので、酒保に駆け込んで菓子などを腹いっぱい食べたり、青森市内にまで足をのばして腹を満たしたこともあった。

例の「八甲田山死の雪中行軍」で有名な八甲田山への行軍もあったが、重たい背のうを背負つての完全軍装で、三里余りの距離を行軍したこともあった。

入営後約二カ月が過ぎたところに、第一期の検閲が行われたが、それをどうにか無事に終了してよいよ戦地に向かうこととなった。

#### 再び中国大陸へ

青森駅から軍用列車で大阪に行き、そこから船で華北の塘沽に上陸した。そこからは軍用列車で懐かしい北京に入った。久し振りの北京で、目に入るものすべてが懐かしかった。戦友にもいろいろと説明をした。

北京からは京包線（北京・包頭間）に乗り換えて万里の長城を越えて内蒙古に入った。内蒙古は当時、自治政府があつて徳王が主席で、日本とは比較的に友好な関係にあつた。その自治政府の所在する張家口に到着した。

見渡す限り果てしない大草原で、太陽が西の地平線に沈む様子は誠に荘厳であり、何とも形容しがたい雄大な景色であつた。この風景はいつになつても忘れら

れるものではない。

所属した部隊は、電信第十四連隊で張家口の街外れの高台にあつて、原隊と同じく有線二個中隊、無線一個中隊、その他から成つていた。

到着した当時の張家口は、まだ真冬の時期で、日中でも零下十度以下に温度が下がり、夜間になると零下二十度ぐらゐは普通のことであつた。現地住民の居住施設は、床にアンペラを敷き、床下には煙道を設けて煙を通して暖をとっているが、兵舎には床暖房の設備もなく、夜になるとそれこそ耐えられないくらいに冷え込んでいた。

ここでも初年兵として扱われて、相変わらず古年次兵からはいろいろとしごかれていた。

有線中隊は通信班と建築班とで編成されていたが、私は通信班に属していて毎日毎日、「トンツー トンツー」と、モールス符号の訓練で指先がはれあがつていたが、それでも一生懸命に励んでいた。建築班は電柱を建てたり電線を張つたりが仕事で、毎日ほとんど屋外で猛訓練に明け暮れていた。少しでも怠けたり気

を抜いたりすると、すぐさまびんたが飛んできたり銃床などで殴られたものだった。

食事は大豆入りの米飯で、青森の連隊にいたときよりも量が多くて、ひもじい思いはしないで済んだ。

張家口には駐蒙軍司令部が置かれており、北京の北支那方面軍事司令官の隷下にあった。電信第十四連隊は、軍司令官の直轄通信部隊として軍の作戦行動に伴って随所に移動していた。駐蒙軍管内の要衝には、通信所が開設されていた。京包線沿線には、大同、フフホト（呼和浩特）、包頭に通信所があった。

初年兵教育が終了したので、それぞれの通信所に配属され、私は大同通信所に派遣された。大同通信所の近くには、彼の有名な「雲崗の石佛」があったが、私も暇を見付けては時々訪れたものだった。

大同には陸軍の特務機関があった。特務機関とは諜報と宣撫などを任務としている組織である。私たち大同通信所では、ソ連や中国軍の発する無線通信の傍受を行い、それを解読する仕事も担当していた。

大同にしばらく勤務をした後、今度はフフホトの通

信所に移動した。

ここには、彼の有名な、「匈奴キョウゴの呼韓邪コウケンヤ単于タンゴに嫁して人身御供か、友好の使節か」と言いわれて悲劇のヒロインとされた「王昭君」の墓があった。私は兵隊に行っていたおかげで勉強もしたが、今になってはなかなか訪れることの難しい、歴史的な遺跡や土地や話などを知ることができて幸福であったと考えている。

フフホト通信所から、京包線の終着駅である包頭に移った。

包頭は、蒙古大平原の最果ての地である。蒙古馬に乗って大平原を疾駆するさまは誠に荘観であり、ジスガンになったような気分になった。蒙古でなければ得られない経験をしていた。後年、NHKで放送された「大地の子」の馬を扱ったシーンのロケーションは、この包頭で行われたと聞いた。

京包線の沿線にある通信所を転々として勤務している間にも、数々の作戦に通信隊員として参加した。

張家口の西南にある太原には、閻錫山軍が、太原からさらに南下し横河を隔てた河南省には、中央軍第二

戦区の衛立煌軍が勢力を維持して対峙していた。

昭和十六年六月に、我が軍は衛立煌軍に対して攻撃を開始した。大同から同蒲線に沿って南下して山西省に入り、衛立煌軍を撃破しながら太原を経て、臨汾、汾陽に到り更に南下を続けて運城に向かうもので、この作戦は太行山脈を縦走南下した、支那事変の中でも最大規模の大作戦であり、大きな戦果を挙げたといわれている作戦であった。

臨汾には、郷土部隊の弘前第八師団の主力が駐留していたので、戦場での再会ということで喜び合ったものだった。

歩兵部隊が前進して敵をけちらかし、その後を我々通信隊が進んで行った。あるところで、山間を進撃していたら、山の綾線から敵兵の射撃を受け、戦友の一人が足に弾丸を受けて負傷し、後送されたこともあった。敵は、戦闘力のない通信隊や輜重隊をよく知っていて、歩兵が進んで行くときには隠れていて、その後姿を現しては攻撃をしてくるのであった。

あるとき、高台で野営をしていた夜半に、突如、暗

やみから銃声がとどろいてきた。そのときは恐怖感で頭髪が逆立ったような気がしたが、何事もなく全員無事ではっとしたこともあった。

行軍の間には、敵が慌てふためいて逃げていった様が、あちらこちらで見受けられた。その現場には食べ残したままの高梁飯の残りが散乱していたり、ときには敵兵の死体そのまま放置されているところもあった。戦争の実態をまざまざと見せつけられた行軍であった。

やつとのこととで黄河の北岸、運城に到着した。運城には海軍の航空隊の基地があった。ここから毎日、重慶爆撃に出撃していた。運城から更に南に向かって歩きやつとのこととで黄河の湖畔にたどり着いた。ここで約二カ月間にわたった、今次の作戦が終了した。しばらく休養して、また、歩いて原隊に帰還した。

この作戦は、暑い盛りの中での作戦行動だったので、一番難儀をしたのは水の補給であった。炎暑で喉がからからに乾くが、水筒の水はすぐに飲み干してしまい、すぐには補充ができなかった。軍馬に飲ませる

ための携行水まで兵隊が飲んでしまった。

原隊に帰還してからも、短い期間の作戦には度々参加していたが、昭和十八年八月に待ち望んでいた除隊命令が出て、三年と八カ月にわたる軍隊生活に別れを告げて兵隊服を脱いだ。

自由を束縛されていた生活から解放された瞬間には、天にも昇るような気持ちの開放感が、体いっぱいにみなぎったことを今になっても忘れられない。

直ちに華北交通の元の所属に復職することとなった。一緒に除隊した同年兵の中には、その後再び召集を受けて戦地に行き、残念なことに戦死をした者も多々いた。

#### 復職してからの生活

元の職場に復職してから平常の生活に戻るまでにはしばらく時間がかかった。いわゆる兵隊ぼけであった。

戦局は、ミッドウエーにおける敗北、以後は「我に利あらず」で、南方戦線各地で、敗退に敗退を重ねていた。ついにサイパン島、硫黄島もアメリカ軍の手に

落ちてしまった。そこから発進したB29爆撃機により、日本本土爆撃が繰り返され、日本の全土は焼土と化しつづけたが、まだまだ当地は本土と違って米軍による空襲はなかった。空襲が全然なかったわけではないが、B29爆撃機による空襲は重慶を飛び立って満州の重工業地帯に対して行われていたので、北京周辺は何事もなくすこぶる平穏で、平和的な毎日であった。

ただ、何となく気にかかっていたことは、そのころ現地の通貨である連銀券が、中国の通貨に対して値を下げはじめて物価が高騰してきたことである。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の終戦に関する玉音放送があったが、その日は特に暑さの厳しい日であった。華北交通本社の講堂に集まった社員一同は、かたずを飲んで何のお話かとばかりに緊張して待っていた。ラジオは雑音がひどくて、はっきりと内容は聞き取れなかったが、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」のところはどうか聞き取ることができた。これで戦争が終わり、日本は敗れたということを知っ

た。

体中の力が徐々に抜けていくような気持ちになり、ただ、ぼう然自失の呈だった。

私は、この玉音放送のあった一週間ぐらい前に、このような事態が起きるのではないかというのを薄々と感じていた。それは知人の中国人から、「日本はポツダム宣言を受け入れるらしい」ということを知らされたからである。彼は、重慶からの短波放送で、日本政府が中立国を介して、連合国側とポツダム宣言に基づいての和平交渉を始めたということを知ったので、それを私に伝えてくれたからである。しかし、そのとき私は半信半疑の気持ちで、彼に對して、「そんなことはあり得ない」と言い切っていた。

しかし、日本が敗れたことは天皇陛下のお言葉として聞いたことにより、それは現実のこととなった。しばしの間ぼう然としていたが、たちまち虚脱状態に陥り何もかにも信じられなくなった。

これからどうなるのか。内地は爆撃で徹底的に破壊されて焼け野原になっており、そのうえに極度の食糧

不足で、食べる物もなく多くの人が餓死しているという噂が、どこからともなく流れてきた。

そんな不安な日々を過ごしていたが、その不安な気持ちを少しでも紛らわすために、毎日毎夜、麻雀や碁・将棋や酒で過ごしていた。

我々とは反対に、戦勝に酔っている中国人は、毎日の如くに市内を練り歩いていた。

そのうちに、内蒙古などから命からがら逃げてこまでたどり着いた同胞が、市内にある学校や日本軍兵舎などに収容されはじめた。長年にわたって艱難辛苦の末に築きあげた全財産を捨てて、着の身着のままの姿で避難してきた人を見ると、たまらない気持ちになったが、どうする手段もなく、ただ気の毒と思うだけであった。

当時はまだ日本人に対する略奪、暴行事件は少なかった。それは終戦後も日本軍が治安維持に任じていたからであった。

日本の降伏が予想外に早く、終戦後の対応についての方策が進んでいなかったため、蒋介石は、随分とろ

うばいしたということも伝えられていた。そのころ蔣介石の率いる中央軍は、重慶や山西省などの奥地にて、その周囲は八路軍の勢力範囲であった。

中央軍は、日本軍の武装解除を行って兵器の引き渡しを受けるためには、兵力を華北地区に進出させる必要があったが、その途中には共産八路軍がいて中央軍の進出を阻止しようという行動をとっていたので、簡単には動くことができなかった。そこで蔣介石は日本軍に対して、中央軍が華北地区に進出するまで、治安維持に当たるように要請したためであった。

そうこうしているうちに十月になった。十月になるとアメリカ軍が進駐してきて、日本軍と交代して治安維持に任じた。そのとたんに北京市街の治安は悪化して、中国人による日本人に対する略奪、暴行などの事件が頻繁に発生した。身代金目的の誘拐事件も発生した。私たち日本人は息をひそめて生活し、一日も早く引揚げの日が来ることを祈る毎日となった。

八路軍に一時拘束される

昭和二十年十一月、華北交通の残務整理のために、

山東省の徳県というところに出張することとなった。

徳県は津浦線の沿線にあって天津から約二百キロメートルの地点にあった。行きは何の問題も事故もなく無事に徳県に到着して仕事をした。さて、仕事も終わったので本社に戻るべく徳県の駅まで来たところ、線路が不通になっているということを知らされた。八路軍が中央軍の北上を阻止するために、鉄道線路の破壊を企てたのであった。駅には、天津や北京方面に行く邦人が二十数人ほどいたが、みんなで話し合い、このままここにとどまってもいつ開通するのか分からないので、やむを得ず線路沿いに歩くことにした。駅を出て約三キロメートルほど行ったところで、線路が外されて曲げられているのを見た。枕木も撤去されていた。ひどいものであった。この破壊作業には、付近の現地農民が駆り出されたらしい。その破壊状況を見ながら、これではいつまで待っていても列車は動かないとあきらめて、歩くしか手段がないと観念したものであった。

更に二キロメートルばかり進んだところで、線路の

右側にある部落の中から突然に銃声がした。その銃声を聞くとほぼ同時に、八路軍の兵士がばらばらと部落から飛び出して来て、私たちを包囲して銃を構えて誰何した。私たちは一人一人、行き先や目的を尋ねられて、そこから有無を言わずに兵士に囲まれて、彼らの兵舎に連行された。

兵舎では、若い将校から更に詳しく事情を尋問された。その結果、事情が了解されたのか、そこで解放されたが、その前に、その将校から共產主義についての演説をひとくさり聞かされた。しばらく休んでから、護衛兵を付けられて送り出された。途中の部落では八路軍の兵士が護衛しているのに、現地農民が近寄ってきて罵詈雑言を浴びせたり、更に唾を吐きかけたりしてきた。危害を加えられそうにもなったので、護衛の兵士が制止してくれた。その日の夜は、護衛兵によって現地の民家に泊めてもらい、三日目に滄県というところにか無事にたどり着いた。

ここには、日本軍の守備隊がまだ治安維持に当たっていたので、ほっとして疲れが一遍に吹き出してし

まった。しばらく休んでから鉄道で天津に戻り、華北交通の事務所に戻った。

昭和二十一年の正月は天津で迎えたが、まだいつ帰国できるのかも立っていなかった。

#### 引揚げと人生再出発

年明け早々に、民留民団から、それぞれ荷物をまとめて郊外にある元陸軍の天津貨物倉庫に集合するように、との指示があった。いよいよ引揚げかと思うと、胸が高ぶってきて落ち着かなくなってきた。

天津貨物倉庫では数日を過ごし、引揚げ船が入港するのを待っていた。所持品の検査が厳重であったが、なんとか無事にバスをした。それこそ重箱の隅をつつくようにして調べられた。

そのうちに、米軍のLST上陸用舟艇が引揚者を乗せるために入港してきた。私は他の人々と共にその引揚船に乗ることができて、やっとあんの気持ちがいよいよ、ほっと心が安らかになった。

船が内地に近づくに当たって、遠くに青々とした陸地が見え出した。だんだんとそれがはっきりしてき

て、緑濃い九州の山並みとなった。思わず、自然に涙が流れてきた。大粒の水玉が、ぼつりぼつりとこぼれ落ちた。

戦いに敗れても、我が山河は温かく迎えてくれた。

検査などの上陸手続きで二、三日抑留されたが、一時金を受け取り、佐世保から引揚列車に乗った。途中、長崎、広島の前爆被災地の凄惨な状況を見て、戦争の恐ろしさをつくづく肌で感じた。車中から眺めるかつて繁栄していた中小都市も、すべてが焼け野原となっており暗然とした。

ようやくのことで、懐かしの故郷、一関駅に着いた。駅前の広場も穴だらけになっていて空襲による爆撃の激しさが実感させられてりつ然としたものだった。

やっとたどり着いた我が家では、母と妹が温かく迎えてくれた。

裸同然で引き揚げてきたのだから、たちまちのうちに生活難に陥ってしまった。やみ米を背負って町方に売りに歩くこともしばらくやったが、長続きはしな

かった。

敗戦の傷跡がまだ癒えない、昭和二十二年と翌二十三年の二年にわたって、続けて一関地方を襲った大水害によって死者四百七十三人の犠牲者を出し、更に多数の家屋が流失、破壊されて泥水に埋まる大災害に見舞われた。戦争による破壊に加えて自然の怒りによる災禍に、一関地方は悲惨の極限に達した。

私は、幸いにも渡満以前に勤務していた国鉄の職場に復帰することができたので、それらの苦難に屈することなく、新しい日本の再建設のために微力を尽くすことができた。

昭和四十九年三月に、国鉄を定年退職した。子供たちもそれぞれに、自分で決めた道を進み、それぞれの職場において善良な社会人として活躍している。孫も順調に育ち、憂いのない生活をしている。

今は、妻と二人で年金生活で慎ましく平和な余生を送っている。

あの時代の苦しみが、うそのような平和な日々であるが、この平和の有り難さを大切にしていきたいもの

である。

## 私の引揚げ記録

東京都 野口敏子

### 一 私の生い立ち

私は、大正九（一九二〇）年七月に札幌市で野口文蔵の娘として、五人兄弟姉妹の四番目、女では次女として生まれました。成長してから聞いたことですが、父も母も、それぞれの生家は北海道古宇郡泊村で鱧漁業を営んでいた網元でした。母が、浜続きであった父の所に嫁入りしたとのことです。

その後、御殿を建てるほどであった豊漁が終わりを告げて、鱧がばったりと捕れなくなり、野口の家もご多分に漏れずに大きな影響を受けました。加えて祖父が急死し、父は若くして家を相続することになりました。祖父の跡を継いで、網元としての仕事をしばらく続けておりましたが、漁が不振ではどうにもなら

ず、漁業関連の企業にサラリーマンとして転身し、家長としての責任を背負うようになったということです。

勤めの関係で、浜を離れて小樽市に住まいを替えることになり、私は小樽市立緑小学校に入学しましたが、二年生になった五月に、子供の教育を第一と考えた両親が、教育環境が整っている東京で勉強するのがよいと、一家を挙げて東京に引っ越すことになり、私は、武蔵野第一小学校に転校しました。

武蔵野第一小学校を卒業したのち、当時の東京府立第四高等女学校へ入学、さらに奈良女子高等師範学校へと進学しました。

奈良女子高等師範学校在学中に、国は戦時対策として学生の修学期間を半年短縮する政策を打ち出しました。私たちは、昭和十七（一九四二）年九月に高等師範学校を卒業することになりました。そのころ、父は既に中国上海市の企業に勤めていたので、私は父のいる上海の居留民団立第二日本高等女学校に教諭として赴任することになりました。当時の上海にはいろいろ